

## 第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

### 報告書資料 復興支援-14

学校名・団体名	南三陸町立入谷小学校
HPアドレス	<a href="http://academic4.plala.or.jp/iriya_e/">http://academic4.plala.or.jp/iriya_e/</a>
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	学校におけるヤギの飼育・繁殖活動を通じた心の教育
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>本校におけるヤギの飼育活動では、保護者、地域、教員の協働作業が展開され、児童はヤギと触れ合うことによる生命尊重、他を思いやるやさしさ、動物に対する興味関心を高めることができる。また、ヤギ小屋の修繕に、震災後のボランティア活動がきっかけで地域に住み続けている方に依頼することで、地域と学校のつながりをさらに強め、ヤギを仲立ちとした学校、地域、保護者の交流が活発になり、学校の活性化につながると考えた。</p>	

## 活動の実際と成果

### (1) ヤギの飼育小屋の修繕

本校ではヌビアン種のヤギ2頭を通年飼育している。このヤギは震災の年に沖縄から支援として寄贈されたものである。今回の助成をいただいて、6学年児童20名が図工や学級活動の時間にヤギの小屋の修繕に取り組んだ。活動期間は11月から12月である。

ヤギ小屋の修繕として、これまで土だったヤギ小屋の床面に木材で作製した、「すのこ」を設置することにした。6年生児童がヤギが過ごしやすい「すのこ」になるように、板と板の間の幅を調節しながら釘を使って板の打ち付けなどを行った。6年生の児童の実態に応じて、材料は適切な大きさに切断してもらったり、危険のないよう処理してもらったりして、無理のない範囲で取り組ませた。しかし、図工の時間以外はハンマーや釘を使って板を打ち付けた経験のない児童が多く、釘が途中で曲がってしまったり、釘がななめに入ってしまったりと、かなり苦戦した児童が多かった。数日かけて完成した「すのこ」を小屋の床面に設置した。これでヤギが嫌う床面の湿気が取り除かれ、飼育環境が改善されることになった。また、児童にとっては、自分たちの作った作品がヤギの飼育環境改善に役立つことに喜びを感じ、自己有用感を高める契機となった。

今回の小屋の修繕は、教師と児童だけでは難しい面もあるため、震災後のボランティアをきっかけに、地域で大工として働いている方に協力を依頼した。実際に児童とコミュニケーションをしながら小屋の修繕にあたり、教室で自身の経験を話してくれたりして、地域と学校との結びつきを深めることにもつながった。

さらに、3月には春に出産が予定される母ヤギの産室の防風対策も行った。防風ネットやトタンを使って小屋を覆うことで、冷気が産室に入り込まないようにし、生まれたばかりの子ヤギが衰弱することのないようにすることができた。去年は2頭生まれた子ヤギのうち1頭が、寒さのために死んでしまった。今年は、上記のような対策をとることで、無事に子ヤギを出産させたい。子ヤギが無事に生まれれば、近所の仮設住宅の住民の人気者になると思われる。被災地にある学校として、地域に明るい話題を提供していきたい。



### (2) ヤギの交配

11月に近隣の市で雄ヤギを飼育している方から1ヶ月ほど雄ヤギを借り受け、交配を行った。児童はこれまで、メダカなど魚類の観察を通して生物が生まれるにはオスとメスの存在が必要不可欠なことは分かっている。ほ乳類の誕生にもオスが必要であることが分かり、交尾の様子も写真などを通じて観察することができた。また、お借りしてきた雄ヤギは体も大きく、繁殖期のため気も荒くなっていた。雄ヤギの状態を観察することで、動物の繁殖期について興味をもって調べるなど、児童の動物の生態に対する関心や理解を高めることができた。

3月になって雌ヤギのお腹が大きくなり、乳房も目立つようになってきた。本校ではこれまで4回学校でヤギの出産を行っており、3月末にも5回目の出産を観察できるだろう。子ヤギの出産を児童とともに楽しみにしている。



### (3) ヤギの飼育活動

日常的なヤギの飼育活動として、給餌、給水が欠かせない。6学年児童が登校時と下校時に干し草を給餌し、水も新鮮なものに取り替えている。今年度の冬は近くの農家からキャベツやカボチャの残りを頂戴することになり、児童とともに畑に取りに行った。ヤギのような大きな動物の世話は、学校以外にも多くの方の協力が必要になる。ヤギがいることで保護者以外の地域の方との交流が生まれ、学校と地域の結びつきを強めることができた。